

令和2年度 学校評価シート

学校名： 和歌山県立和歌山東高等学校

学校長名： 石田 晋司 印

めざす学校像	生徒が確実に成長する学校
育てたい生徒像	社会でより良く生きる力を持った生徒

本年度の重点目標 (学校の課題に即し、精選した上で、具体的かつ明確に記入する)	1 生徒のアセスメントを充実させる
	2 ルール・規則を守る(自律)力を育てる
	3 自他を理解して協調する力を育てる

中期的な目標	語彙力と主体的に学ぶ意欲を育て、基礎的教養を養う
	校内整備を充実させ、学習環境の充実を図る
	地域・保護者との連携で生徒の成長の機会を充実させる

学校評価の結果と改善の方策の公表の方法	ホームページへの掲載
---------------------	------------

達成度	A	十分に達成した。(80%以上)
	B	概ね達成した。(60%以上)
	C	あまり十分でない。(40%以上)
	D	不十分である。(40%未満)

(注) 1 重点目標は3~4つ程度設定し、それらに対応した評価項目を設定する。 2 番号欄には、重点目標の番号を記入する。 3 評価項目に対応した具体的取組と評価指標を設定する。
 4 年度評価は、年度末(3月)に実施した結果を記載する。 5 学校関係者評価は、自己評価の結果を踏まえて評価を行う。

自己評価					令和2年度評価(3月24日現在)		
重点目標					令和2年度評価(3月24日現在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的取組	評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善方策
1	学力や成育の両面で多くの課題を抱えて入学し、目的意識を持って学校生活を送る現状が見られる。こうした生徒の実態を踏まえた効果的な指導を充実させることが課題である。	生徒の存在を絶対的・肯定的に認め、生徒の実態把握に努めているか。教員のアセスメント力の向上および家庭訪問等を通じた生徒理解、積み上げる学習の推進に努めたか。	生徒一人ひとりを丁寧に指導することで中途退学、原級留置の減少に繋げる。	中途退学、原級留置を減らすことができたか。生徒一人ひとりの理解に努めたか。	生徒の出身中学校からの聞き取りを充実させ、現職教育等を通じて全教職員の情報共有を図った。各分掌および各委員会同士連携を深め、問題行動や特別支援の観点から生徒一人一人に寄り添った指導を行うことができた。ただ、特別支援が必要な生徒へのサポート体制はできているが、生徒指導面でのSCやSSWと繋がった多方面からの指導体制の確立は途上である。	B	生徒の諸問題(問題行動・特別支援等)を全教職員で共有し、生徒個々の対応により一層の工夫を図るとともに、チームによって解決を見出す力をつける。さらに、SCおよびSSWやその関係機関と強固な連携を図る。授業に関しては、より理解しやすい授業の研究を進めるとともに、ICTを活用することで、学習意欲を向上させる手立てを構築する。
			教員各自がアセスメント力向上を常に意識するとともに生徒の実態の把握に努め、校内支援体制(面談、教育相談、SC・SSW)の活用と積極的な保護者連携を図る。基礎学力診断テストの実施と活用(学び直し)を図る。	事後指導、未然防止のための家庭訪問の実施ができているか。校内支援体制の充実及び情報共有ができているか。			
2	規範意識が希薄で社会的なマナーに欠ける言動も見受けられるため、社会的な無知を減らし、望ましい生活態度やマナーについて指導する。	自己内に規範やルールを知識として持つことが出来ているか。また、その実践できる力を育てられたか。	携帯電話等の預かり指導の撤廃や交通安全指導等の規範意識の向上を図る。	授業中の携帯電話等の使用や交通安全等について理解と周知をさせることができたか。	生徒の携帯電話の授業中使用は、少数にはなったがまだ0ではない。また、未成年の喫煙についても啓発活動を行っているが、未だに校内での喫煙が見られ、特別指導等を行っている。今年度は、問題行動を未然に防ぐ施策として、小さな問題も見逃さずに生徒に対応することを行った結果、問題行動件数が昨年に比べ、約半数に減少した。	B	規範意識や社会的なマナーを自己に知識として持たせるため、教職員全体で指導に取り組む、教員間の温度差をなくし、指導の効果を上げていく。
			啓発活動の充実を図る。	たばこゼロ通信等の配布ができたか。			
			アセンブリーや個々の指導を通し規範意識の向上の機会の充実を図る。	計画的にアセンブリーを充実した内容で開催できたか。個々に応じた生徒指導の充実を図れたか。			
3	生育や発達が起因とする、自他の理解にさまざまな問題や課題を抱える生徒が多く、他者理解をすすめる協調性を育む必要がある。	他者を理解する意欲とスキルに加え、自分を理解してもらおうとする意欲とスキルを育てられたか。	中学校訪問、生徒面談、積極的な家庭訪問の実施等により、生徒一人ひとりの発達の課題について理解や把握に努める。	校内支援体制活動(教育相談、SC・SSW等)の充実を図れたか。	特別支援並びに教育相談活動の面では、ケース会議を開催し、担当者間での情報共有を確実にすることで支援体制の確立を図った。	B	校内の支援体制の充実を図るため、組織的に対応する体制の確立を目指していく。
			将来を見つめる力の育成及び生徒の活動の場の充実に努める。学校運営協議会と積極的な連携を図る。	キャリア教育を計画的に展開できたか。部活動やボランティア活動の機会の充実を図れたか。			

学校関係者評価	
令和3年 2月26日 実施	
学校関係者からの意見・要望・評価等	
<p>生徒による授業評価の結果 授業内容や授業進度等生徒自身がどう感じているかを問うと、「よくわかる」や「自分の学力に合っている」など約8割近くが肯定的な回答であり、この割合は、年々増加している。 また、「遅刻や早退・欠席などをせず登校できているか」の問いにも「できている」「ほぼできている」を合わせると約9割の生徒が頑張っていることがわかる。特に、遅刻については、学校設定科目「教養基礎」の導入効果が十分出ており、今後も継続する必要がある。 一方、生徒の家庭での学習の状況については、依然として「していない」が大半を占め、その割合も年を追うごとに上がっている。 生徒の授業理解と家庭学習を結びつけ、「自ら学ぶ」姿勢をつけさせるような方策を考えなければならない。</p> <p>生徒による学校評価の結果 学校生活全般について、肯定的な意見が多く、有意義に過ごしているようである。この割合も年々増加してきている。</p> <p>外部の方から評価では、本校生徒に対してや本校独自の特色について十分理解されており、肯定的な評価を得ている。地域の学校としての期待も寄せられており、本校の特色・特性をさらに進化させるよう努力していく必要がある。</p>	